

丸の内「常盤塾」定例会 議事録

2010年6月12日 10:00-13:00

【参加者（敬称略）】 常盤、片平、古川、古城、久保、昌子、浅井、大下、丸山、松崎、今田（11名）

【議事録】 今田

議事： ①常盤先生よりお話
②「モノ学の冒険」第Ⅲ部読解（古城さん）
③6/24 コクヨ見学に向けて

1-1)【常盤先生より】 中国雑感—上海万博に思う

みなぎっているエネルギーがすごい。毎日40万人～50万人の入場があるという。大阪万博を越える7000万人目標に国を挙げて邁進している。

映像技術の急速な進歩が目につく。中国館で流している清明上河図の再現絵巻（120m×7mの動画）には驚かされた。北京オリンピックといい、デジタル映像の技術に注力しているように思われる。万博というより映像展と捉えてもよいぐらいだ。

文革から現代までの中国を振り返りつつ、「2030年の中国」を展望した映像も高い動画技術で示されていた。強調点は未来への夢と環境との両立。

日本政府のパビリオンは歴史の振り返りが中心でぱっとせず、民間企業が共同出展した日本産業館のほうがまだ面白かった。上海汽車と提携しているGM館も20年後を見据え、2030年の車社会、パーソナルビークル時代の夢を強調していた。中国は電気自動車への取り組みに本気と思われ、電動自転車は既に大量に走っている。

一党独裁がもたらす光と影に思いを馳せるが、60歳以上の年配者はむしろ昔を懐かしんでいる事実もある。現代は自由競争が激しすぎ、格差が拡大している。共産党時代は、最低限の生活は保障されていた。現実の中国と共産党独裁とはどのように折り合いを付けていくのだろうか。

しかし視点を変えれば、果たして民主主義とは本当に、絶対的に良いものと言い切れるのだろうか。チャーチルは、民主主義は最悪のシステムだがこれを超えるものが見つからないことがさらなる不幸だ、という皮肉を残している。慣れ親しんだシステムだから深く考えず受け入れているが。世の中にはイスラエル。イラク、イランなど独自の体制で人が暮らしているシステムもある。それはそれで絶対的な不幸ではないことに注目する必要があるだろう。民主主義は単にそういう見方がある、つまり尺度の一つに過ぎないのかもしれない。

中国では仕事も勉強も若者の熱気が盛んだが、格差こそがそのエネルギー源になっている。格差も必ずしも悪ではなく、上に行くための活力源になりうる。プラス面マイナス面

両方を見なければなるまい。

職業観も身軽で、良い条件があるとどんどん移っていく。育て甲斐がないとの意見もあるが、それはそれで受け入れねばなるまい。日本的な尺度だけで捉えるわけにはいかない。日本は実のところ、みんな同じ。本気で食うに困っている人はまずいないし、いい家に住んでいい車を持って、それなりに暮らしている。中国では貧富の差がばねになって、活力が生まれている。

但し格差が不満の種にもなりうることもまた事実であり、是正の手段は講じられている。沿岸・内陸の貧富差に対し、政府が「家電下郷」を推進している。生活家電の購入に対して補助を出している。

全体的に豊かというか贅沢になってきている。工場の子供従業員も普通に化粧している。彼女らの間で日本製品への憧憬は強い。一種の神話のようにさえなっている。その影でバブルは着実に進行しており、不動産価格が1年で2倍の勢いで急騰している。政府の抑制もあまり機能していない。

しかしそれでも、あらゆる現象を機会だと捉えている。行動が早い。やってみてダメだったらやり直す。チャレンジに対する意欲がすごい。ハングリー精神がみなぎっている。新聞報道的な事実説明だけでは分からない中国の熱気、モチベーションの源、自分の目で見て初めて分かることが多い。

日本の視点（チャンネル）だけで見ても本質は見えない。チャンネルを変える必要がある。自分たちの尺度だけしか使わないでいると、本質は見えない。尺度は1本じゃだめで、いくつも物指しを持たねばいけない。

ものづくりに関して、技術だけでは限界がある。やはり「ことづくり」。夢とか目標とかをどうやって打ち上げていくか。中国の熱気と急成長を己が目で見ると圧倒される。スケールがでかい。技術の定義そのものを含めて真剣に議論しなければならないだろう。

1-2) 【議論】

片平： ずっとコピーで食ってきた国だが、今はどう？

常盤： まだその側面はあるが、今はただコピーするというより、世界から技術を買っちゃう大国としての立場が強い。日本の新幹線をはじめ、あらゆる国や企業が中国に売り込みに来ている。何も自前で開発しなくていい、良いモノは買っちゃえばいいんだから。「あれは日本の技術だ」とかこだわっているのは、日本人の尺度にしかすぎない。ユーザー中国にしてみれば、使えればよい。

古川： 中国は現在、スマイルカーブの真ん中、つまり組み立ての部分丸ごと担っている。この上、基礎技術を買ってすませ、市場としても巨大になり、両端も持ってかれたらもう太刀打ちできないんじゃないかと。

常盤： 使えるものはどんどん使うって発想はありでしょう。日本のような、己が技術へのこだわりもいいが、やはり技術は使われてなんぼだ。

古川： 儲かっているのは、受託生産している台湾企業。台湾で請けて中国内地で作りまくっている。うまく伝っている典型が Apple。付加価値の部分をうまく押さえている。藤本隆宏先生言うところの摺り合わせは日本のお家芸かもしれないが、モジュール部分をここまで持っていられるのかどうかと。

常盤： EMS は世界で台頭している。日本企業が高い独自技術という川上部分にこだわっているうちに、川下の製造工程で中国が儲けている。

古川： 日本企業はたしかに真面目すぎるのかも。大規模ストにさらされながらも、その地の工場と共に生きようとしている。台湾メーカーは軒並み、さっさと東莞を見きって南寧へ移り始めている。

古城： 車メーカーは設備が大きすぎて、そう簡単に移れないってことも事実だ

常盤： より高い待遇を求めて自由に移動するのは、本質的には良いことだ。購買力も高まるし、新しい土地の活性化につながる。

古城： どだい、賃金差で利益を出そうという発想自体がもう無理だ。付加価値を高めることで実現しなきゃ。

丸山： 今の中国が進んでいるのは、かつて日本がたどってきた道に他ならない。いわゆる「技術ただ乗り論」、アメリカの真似をして追いつき追い越す。今、日本がその対象になっているわけだ。

古川： かつて日本の職人は、相当自由に各地を渡り歩いていた。戦争の際に政策により土地に縛り付けられた経緯がある

常盤： 腕一本で各地、それが職人の世界。渡り歩いて腕を磨く。それが暗黙知を生み出すわけだが、あまり暗黙にこだわるのもどうかと思う。やはり知恵は共有できなければ。

片平： それが教育、およびランゲージの共有ということだろう。修羅場をくぐり抜けた人たちが集まって、高次のランゲージを共有化していく。暗黙知を暗黙のままにしておかない。できる人間は必然的にあちこち渡り歩くことになる。ただ、今の日本はランゲージの共有までは行っても、そこから先に進まない。外に出て行こうとしない

古城： 日本人の留学が減っているって？

片平： そりゃもう激減。できる人間が行こうとしないから、かえって日本人に課されるレベル入が高くなり、入りにくくもなってる。悪循環

常盤： 日中の若者を見比べると、向学心に大きな差を感じる。中国では夢、あこがれ、未来みたい感覚が大きい。

古川： みんなで「分からない」とか「できない」といい続けていれば、実はかえって楽。それでも食えるから、上昇志向が沸かない

今田： 昔はどうしてみんな、出世したがつたんですか

常盤： そりゃあ階段を上るたびに開ける将来の夢があったから。今は何やっても、無理しなくても食えてしまうのが問題。

片平： 食うや食わずの暮らしを経験すると逆に面白くなるらしい。教え子に悲惨な貧乏

旅行を経験したがゆえに、インドにはまった女子学生がいる

【課題研究】古城「モノと感覚価値—マネキン研究の立場から」モノ学の冒険第3部 P257
～280

※. 要約のみ記す。大要は発表者によるサマリを参照

- ・マネキンから醸し出される感覚価値はすべて人が与えるもの。人間の想像力や美意識の産物、あくなき美の追求の結晶
- ・商業空間におかれ、衣装を際立たせるのが目的（ヘッドレスマネキンの対応）
- ・ファッションに人を惹き付ける関係のリアリティが本質（リアルマネキンこそ本流）
- ・感覚価値＝衣装の着脱に手間がかかる分、可愛いと思う感情
- ・マネキンに精气と命を吹き込むのは、それをいとおしく感じ思いを投影する人の感覚

技術の進化に伴い、限りなくリアルなマネキンが制作可能になった。しかし人に似るほどかえってネガティブな感情を引き起こす「不気味の谷」との相克がある。ロボット ASIMO は子供体型にすることと顔をヘルメットで隠すことで可愛さを演出している。

日本人はもともと、浮世絵など三次元を二次元表現することが得意。現在、日本のお家芸であるアニメから三次元のフィギュアが生みだされている。本来の意味のバーチャル（実質・本質）化が起きている。アニメキャラ的に可愛い。リアル→バーチャル→デフォルメ→再びリアルの過程で生み出された立体キャラ（マネキンやフィギュア）には不気味さや違和感を覚えない。すなわちマネキンは仮想現実の一種とも考えられる。

バーチャル空間でのコミュニケーションということでアバターを考えたい。コミュニケーションの本質は魂のぶつかり合いであり、必ずしも肉体を必要としない。アバター同士のコミュニケーションのほうが本質に近いのかもしれない。バーチャル会議の例として WBS 10/6/3 放送された IBM が挙げられる。費用の節約だけでなく、アバターに仮託したより本質に添うコミュニケーションが展開されている可能性がある。

【コクヨ見学】

6/24(木)15:00～

各自お尋ねしたい事項を 6/14 までに正富氏へ集約のこと